

## 「三千世界商往来」<sup>やりくりおうらい</sup>と先生金右衛門<sup>シヤンスイ</sup>

松 崎 仁

「三千世界商往来」は明和九年（一七七二）正月十日より大坂中の芝居（座本市山助五郎）の二の替に初演された、初代並木正三の新作である（注一）。この狂言の序幕から三幕目までは、当時の狂言にはいささか風変わりな場面を展開する。まず序幕から見て行くことにする。

序幕。長崎丸山の廓。普通はここで若殿の遊興―傾城との恋―そのための金の工面―それに乗じた敵役の策謀の成功―お家の重宝は敵役側の手に入り、お家の危機は深まるというように展開する。本作でも采女之助という若殿と傾城長門との恋仲、お家の重宝千鳥の香炉、長門に恋慕する敵役と、一応の条件は揃っているが、長崎であるからここに阿蘭陀人を登場させる。千鳥の香炉は阿蘭陀人あんなぶらかんりやうすの手に渡り、甲比丹ていかうという阿蘭陀側の「大将」が長門に恋慕する敵役である。しかしここにオランダ通詞久五郎という男が、命の恩人の息子である采女之助のために、甲比丹ていかうに取り入って金を作り、采女之助の廓の借金を返済したり、

はかりごとを以て香炉を取り戻し、ていかうを殺すというような「お家の忠臣」風な活躍をする。阿蘭陀人を敵役と見立ててみれば、基本的な構成は序幕として珍しいものではない。

しかしこの序幕の特色は、お家物の性格がひどく後退して、主要な興味は阿蘭陀甲比丹と通詞久五郎が大がかりな抜荷をしていることに移っている点である。たとえば、変名又兵衛を名のつている久五郎が「大概おも立つた代口物は皆抜いて売てしもふた」と言うのと、甲比丹ていかうは、

表向で換へると こつちの物は二束三文にして 其上 日本  
物は高ふして突付おるによつて われと相談で 力一ばい抜  
売によつて 金はたつぶりじゃ

などと言う。公式の貿易は長崎会所に於て「年番町年寄差図を請、会所年番之者并吟味役目付之者立合、蔵より出し入可仕、小分之義たりといふとも、一人にて出納すべからず」（『通航一覽』正徳乙未年六月会所江条々）というような厳重な管理下で行われていた。それを本作では、肥後の国守木村将監が「長崎へ出屋敷を構へて、阿蘭陀の産物 日本産物と 値段を極め取換へる」とセリフで

「三千世界商往来」と先生金右衛門

説明している。取引の監督者は当然長崎奉行であるところを肥後の国守などとおぼめかしているが、とにかくそういう嚴重な監督の目をあざむいて「力一ぱい抜て売」る、大量の抜荷売買をしているわけである。

どんな方法で「抜」くのか、さすがにその手口は劇中では語られていない。現実には唐人屋敷やオランダ屋敷の塀越しに荷物を釣り上げたり、唐人・蘭人の屋敷へ行って密買したり、時には唐船へひそかに泳いで行く者もあったという。しかし、これらはむしろ零細な抜買いで、長崎沖や北九州の海上などでは、沖買と呼ばれる大口の抜買いが盛んに行なわれたこと、天下周知の事実であった。この方が大量の抜荷ができるわけである。もともと海上の沖買は唐船相手に限られ、オランダ船との間には行なわれなかつた（注2）から、甲比丹ていかうのセリフの「力一ぱい抜」くというのは、史実に照らして厳密に言えば、沖買のケースではない。しかし芝居ではそのへんの区別は曖昧であろう。ただ、カピタン自身が抜売をした場合、事実がわかつていても幕府はカピタンを処罰することはできず、譴責するに止まって、実際は「野放し状態」であつたという（注3）。そのへんの現実が甲比丹ていかうの抜売に関するセリフに反映しているのかもしれない。

この序幕は真柴久吉（秀吉）朝鮮侵略後間のない頃で、久吉はまだ九州にいる時という設定だから、徳川鎖国体制下の現象である抜荷は、本当は時代が合わないが、そんな時代錯誤は芝居では問うには及ばずとして話を進めると、柴田勝家の名をもじつた島田大膳大輔勝家が、

本唐人は忠と仁義五常が有 阿蘭陀の奴等は欲深く 根性の悪  
さ 悪ひく

と、ひどく差別的なことを言う。こんな風に阿蘭陀人は敵役にされている。その中でも悪の張本が甲比丹ていかうで、これを初代中村歌右衛門が演じて例の如く実悪ぶりを発揮する。たとえば、信頼していた通詞久五郎に裏切られたと知って怒る場面のトガキは、久五郎の髪をつかみ顔を舞台に捻じつけ、「鬢の毛を喰 むしりなど色々むごふする」とあり、さらに棒で叩き据え、仲間の者に「わいらも共く、にさいなめく」と言い、皆でさんざん痛めつけて泥船へ叩きこむ。あげくに殺そうとするのを人々に留められて退場となるのである。

しかし、次の阿蘭陀屋敷の場では、久五郎の狡計によって攻守逆転して、今度は久五郎がさんざんに仕返しをする。ていかうは傾城長門に惚れた弱味をつかまれた結果、久五郎にいいようにされて、そのあげくに泥仕合で殺されるのである。この久五郎に扮するのが初代藤川八蔵で、実悪から転じた、いわゆる「手強い」芸の持主で、この一座で歌右衛門に拮抗しうる唯一の立役であつた。この仕返しの場面は、この年三月刊の評判記「役者物見車」大坂の巻の歌右衛門評では、次のように評されている（一）内は松崎補入、（二）内は松崎注。以下同様。

皆歌七殿（歌右衛門の甲比丹）の方に尤（もつとも）が重なりて。八甫殿（八蔵の久五郎）方に無理多きゆへ おのづから  
〔甲比丹ノ方ガ〕不便（ふびん）なるやうすにて 〔甲比丹ノ〕  
憎み少なき故 御商売筋の狂言（歌右衛門得意の実悪の狂言）

ながら 「コノ場面ハ」 当り目少なうて近比残念

要するにこの序幕では、歌右衛門は十分に実悪の本領を發揮してはいない。むしろ藤川八蔵の方が映えるように引き立つようにと仕組んだ形跡があり、評判記の八蔵評も「今度は急度精の出やうが見へるぞ〜」と好評であった。

とはいうものの、この序幕の特色はやはり歌右衛門という大立物を甲比丹にして、抜荷を大きな話題に仕立てたことにある。またこの幕には、あとあとの幕まで活躍する「黒ん坊」、つまり南蛮船で渡来して日本人の眼を奪った、近世の文獻には「崑崙坊」とも表記される黒人が登場する。「三千世界」の外題にふさわしい、今の言葉で言えば「国際的」な舞台の広がりも期待させながら序幕は終る。

## 二

第二幕は朝鮮国となる。朝鮮国王は「乾隆皇帝」とあるから、朝鮮も清国もあまり区別がない。が、さきにも書いたように久吉の侵略直後の時代設定で、朝鮮の側に敵役梅入天（実悪坂東若五郎）の日本への寝返りがあったて、敗戦に悲しむ人々がいる。乾隆皇帝は討死し、皇后とうよう夫人は梅入天がわがものにしてしようとしている。そこへ久吉の命を受けた城受取りの使者二名が部下をつれて来て、城内の物品をこごとく運び出してしまふ。使者の一人は歌右衛門の役で、荷物を一つひとつ手帳につけ、とうよう夫人外二人の女を追い立てて退場する。

ところがこれが似せ使者で、あとから本物の城受取の使者が来て、城内が空きがらになつてゐるのに驚く。そして、そのかたりの一人

「三千世界 商往來」と先生金右衛門

は山司（さんし）の 金右衛門に違ひないと言う。

単人 此頃山司金右衛門といふ八幡（ばはん） 三千世界

へ船を浮け 国（くに）島（しま）をかたり尽す

勸解由 此度朝鮮攻めを幸いに 此国へ入こんだとの風説

近世中期、「八幡」とは抜荷売買、またそれをする者の謂いで、オランダ人も *Opium* と云つたという。この狂言の外題には角書があり、右側に「山司金右衛門」左側に「相人久五郎」とある（役割番付）。一座の両巨頭中村歌右衛門と藤川八蔵の扮する役で、久五郎は序幕で既に活躍していた。ところで「相人」は人相見だが「山司」とは何か。この幕では金右衛門はまだ謎めいた人物である。

この幕の幕切れは雨中の海岸で、歌右衛門の似せ使者は部下に沢山の荷物を運ばせ、相変らずそれを手帳に付けているが、芦原に隠しておいた草刈籠一杯の朝鮮人参の荷を背負い、今まで同僚として振舞つていたかたりの相棒を鉄砲で殺し、悠々として「算盤をばち（置）くところで幕になる。評判記はこを「算盤置〜這入（はいる）幕も先（まつ）さらりと計（ばかり）」と評する。歌右衛門の実悪としてはまだ「さらり」としているだけで、多少食い足りないという口ぶりである。

第三幕は舞台書きに「すべて漳州（ちやぐちゆう）の代官位の懸り也」とある。漳州といへば中国福建省にあり、近松が「国性爺合戦」の千里が竹で鞭鞭兵に日本名前を付ける中に「ちやぐち左衛門」と付けるくらいだから、日本人には以前から馴染のある地名だったのであろう。この時近松が粉本とした『明清闘記』には、「爰に漳州府之人甘輝と云者有」と出て来る。『華夷通商考』には「此所繁

昌ノ地ナリ……今長崎ニ來ル処ノ天竺等ノ外國ノ船ニハ船主水主皆漳州國ノ人不レ乗船ナシ……海上日本ヨリ六百二十里云々」とある。

その漳州に歌右衛門扮する山司金右衛門が先頃「吹流されて」来たので、代官が朝廷に伺いを立てたところ、この代官屋敷に「お預ケ」になった。漂着船には日本人の船頭など大勢いて、その連中も毎日食わしてもらっているのに、金右衛門は悠々と茶の湯を楽しんでいる。今日も、良い茶碗を手に入れたから、この掘出し物で一服立てて呑もうと、風炉にかかつて茶を立てている。漳州代官の跡目を狙う岩子（がし）。坂東岩五郎の役）はその大きな態度に腹を立てて罵るが、金右衛門は一向にこたえず、平然と茶の湯を楽しむ。

そこへ「清道の都 乾隆皇帝の臣下」と名のる「ほう金齋」なる者が登場する。「清道」は清国を意味するから、その皇帝は前幕で話題になった討死した朝鮮国王とは別人のはずだが、そのへんの違いにはおかまいなしの乾隆皇帝というのは、ずいぶんの大きな話である。ところでほう金齋は皇帝の命令として、金右衛門は「古今茶道の名人」だから、唐土に留まり国王に茶道を伝授せよ、「恩賞として大名に取立 此漳州国を宛行わるる」と告げ、金右衛門に唐装束をつけさせ、唐の大名にする。

そのあと金右衛門は、代官の跡目を狙う岩子のたくらみをあばいて正義の味方を演じるが、さっきのほう金齋は似せ物で、あとから本物の皇帝の臣下で国郡の領主たる可慶館徳源司が来るので混乱が起こり、その騒動のうちに金右衛門は、代官屋敷の蔵の中の財貨を残らず手下に運び出させてしまう。さては吹流されたというのも嘘で、すべては金右衛門のかたりに掛かったのだとわかり、人々は肝

を潰す。

一方海岸では金右衛門が例によつて手下の運ぶ荷物を手帳に付け、算盤をはじく。すると背高島や小人国・穿胸国の幽霊が次々に現れて、それぞれ金右衛門が自分の国を騙して何もかも取って行ったことを恨む。しかし金右衛門は、

三千世界を駆け巡る俺じや うぬらが阿呆で騙された事を 誰が知つた物で 馬鹿めが

とはねつける。しかし幽霊が「金おこせ」と付きまとうので、小判五十兩ばかり「舞台へざらりと抛る」。幽霊たちは我がちに小判に取りついたので、金右衛門がそれを「肩にて笑」つてよろしく幕となる。

見られるごとく、この一幕は漳州の人々をかたりおおせて、財貨を残らず持ち出してしまふ金右衛門の驚くべき大がたりを描くが、この幕での金右衛門の特色は、茶の湯の名人と触れこんで成功することである。

さて、ここまで読んで来ると、金右衛門という名前から思い当たる人物が浮かんで来る。それが抜荷の首魁といわれた「先生金右衛門」である。中国人が「先生」と呼んだのである。「先生」は中国福州の音で「シャンスイ」と発音するから、彼は日本でも「シャンスイ金右衛門」と呼ばれていた。その音を効かしながら、「山（かたり・ぺてん）」の頭目という意味で「山司（さんし）金右衛門」の役名が作られたものと推測される。「山司」は詐欺師・ぺてん師の意の「山師」にも通ずる。

この實在の「先生金右衛門」については、板沢武雄氏（注4）は

じめ歴史家の手によつてある程度のがわかつてゐる。以下それを参照しつつこの人物の像を描いてみよう。

### 三

抜荷のうち大量の荷物が売買されるのは沖買であることをさきに記したが、その手口の若干は、唐船乗組員から日本の役人が聞き取り調査をした記録——『華夷変態』（注5）——で見ることができるので、その例を摘記する。享保二年の記事である。

唐船当湊（長崎）之外諸方に致し飄泊し、抜売いたし候儀、以前は五島・平戸・大村之地方に而日本人と示合（しめしあわせ）間々抜売いたし候得共、

三年以前からこれらの海域が警戒嚴重となつたので唐船側は困つていたところ、去年三月信牌（貿易許可証）を持たぬ唐船が入港した。勿論交易は出来ないから、荷物は「積戻り」となり、四月に帰途についたが、船客中に呉盛充・鄭二観二名の者が日本の抜荷常習者と連絡を取り、外海で日本人と「示合」、長門領の海域へ導かれる（恐らく日本人が乗込んで水先案内をしたのであろう）。するとそこには「日本人之党類先に待請、金銀を以荷物抜買仕済（しすまし）、右致三案内一候日本人共、引取申候」というように海上での抜荷に成功した。この情報を知つた唐船側は、このうち「鄭二観之水手共を而三人程宛、為三案内一船毎雇乗せ」、長崎へは寄らず直接「長門領・筑前領・小倉領等の地方」で「飄泊」して沖買の日本船を待つようになった。この海域は萩・福岡・小倉三藩の領域が接する北九州沖の藍島（あいのしま）付近で、三藩の縄張の割拠性から取締り

「三千世界商往來」と先生金右衛門

がしにくいので、以前から沖買の穴場であつた。近松の「博多女郎波枕」で「小倉口より波押切つて来る早船」が荷物を下関沖の元船に運んで来るが、この海域で沖買をして来たことを近松は暗示している。

さて、ここで夜に入ると「合図を以日本船唐船に附（つけ）、日本人乗移り候而」商売が行われる。大量で高価な物を「金銀を以即座に払」うのだから、日本人側も相当な資本が必要である。そこで金元の存在が大きな意味を持つことになる。また、日本人側の巧妙な手引、交渉能力、要するにかなりのヴェテランの活躍が必要であつた様子がうかがわれる。

これに対して幕府は何度も取締令を發して禁圧に努めて来た。特に抜荷に対する刑罰は磔・獄門等の極刑を以て臨んだ。しかし沖買人は拠点を長崎から大坂に移し、依然として沖買はやまなかつた。そこで將軍吉宗は極刑を改め「重きものは家財闕所、軽き者は遠島」と刑を緩やかにし、享保三年から施行した。この刑には「追放刑の外に鼻そぎ・耳そぎも加えられていたから、「博多小女郎波枕」の結末で近松は「耳そぐ鼻そぐ血みどろちんがい追払ふ」と書いたわけである。

吉宗の狙いは、すでによく知られているように、捕えられた者に仲間の名を白状しやすくしてやり、また訴人もしやすくしてやることであつた。自分の「差口（さしぐち）」で仲間を死罪に追いやることは、なかなかやれないことだつたからである。他方、公儀は訴人のほかに自訴（自首）も奨励した。張本人でも自訴すれば許され、「大勢差口」をした者も許されたのである。荒野黍典氏の調査によ

ると(注6)、この結果、享保三・四年の二年間には格段に多数の逮捕者があり、そのうちには「主犯」十二名が含まれていた(他に主犯格で未逮捕者は十一名)。この中には大坂を中心とする上方居住者が圧倒的に多いが、出身地を見ると長崎が半数近くを占める。彼等は長崎の取締りが厳重を極めたため居住してられなくなり、無宿化した者であろうとされているが、その中には、「博多小女郎波枕」の毛刺九右衛門一味のモデルとなった抜荷犯の大量逮捕も含まれるのである。

#### 四

さて、この享保三・四年の大量逮捕には、犯人の「差口」が効果を上げている。吉宗のおもわくは残酷なまでの成果を上げた。それについて「兼山秘策」所収享保四年二月七日附室鳩巢書簡を見る必要がある。これも歴史家には周知の文献であるが、重要なものであるから、前後二段に分け、末尾数行を除いて全文を引き、考察を加える。

御前代以来長崎ぬけ売と申事堅御停止候処、とかく止み不レ申候。公儀より御定置候外は売買不レ被レ成苦に候へ共、唐人日本人共に利を要とし申に付、窃に船上にて夜中杯致ニ交易ニ候事に候。当御代(將軍吉宗)に至てぬけ買の張本大勢被レ捕候と、少やみ申候。ぬけ買の者御法度背申に付、必死罪に被レ行候処に、御代(將軍)如何の思召候哉、耳鼻をそぎ候て命を御ゆるしにて候。旧冬(享保三年冬)は別ての張本人三人耳鼻をも構不レ申、其俣御助にて候。其節奉行中申渡候趣は、死罪に

も被レ行程の罪に候へ共、大勢同類を指申に付、耳鼻もそぎ不レ申、其俣助可レ申旨被レ仰出候、是、殊の外成御慈悲難レ有可レ奉レ存候、此御奉公に何とぞ先生金右衛門を己等三人申合候て捕出し候は、一廉の御奉公に可レ罷成候、此度の御慈悲を難レ有奉レ存候て、此儀随分心懸可レ申候旨申渡、追放申候。(傍点引用者。以下同様)

要点を記すと、抜荷はなかなかやまないが、当代將軍の世になり「ぬけ買の張本」を大勢捕え、それに対しては緩刑を以て命を許された。旧冬は特記すべき張本人三人を捕えたが、これは「大勢同類を指」したから、耳鼻もそがずそのまま許された。この時、先生金右衛門を捕らえたら「一廉の御奉公」になるから召捕に努力せよと、これは大坂町奉行が申し渡したのであるが、そう言つて放免したというのである。大物を捕えたのに、金右衛門を捕らえよという特命を与えて放免したというのは、よくよく当局が金右衛門に手を焼いていたからであろう。

ところで右の申し渡しは「旧冬」すなわち享保三年冬である。一方、前記毛刺九右衛門一件の判決申し渡しは享保三年閏十月十九日であつて、この時も三人の大物が放免になつてゐる。まず、「月堂見聞集」を見よう。

野村久左衛門

清左衛門

勘左衛門

右三人の者、方々へ住居仕候抜買頭にて候へ共、其同類訴人いたし、御公儀様より御穿議のたそく(補い)に相成申候故、御

褒美として家財の内四ヶ一（注7）被<sub>レ</sub>召上<sub>一</sub>、残り本人へ被<sub>レ</sub>下候而御赦免、何方に住居仕候共御構無<sub>レ</sub>之候。

要するに、同類の訴人をしているし、今後公儀の取締りの役に立つから赦免するというのである。

この申し渡しは『抜荷筋に付御触書御仕置御下知書寫』（注8）の伺書ではこうなる。

右久左衛門・清左衛門・勘左衛門三人は、先達而申上候通、早速白状致シ、此者共差口にて同類段々召捕、詮議之手懸りにも罷成ものに御座候間、取上置候唐物關所、仕<sub>二</sub>出牢<sub>一</sub>、住居無<sub>二</sub>御構<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>指免<sub>一</sub>哉。右之通被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候者、訴人など出候ためにも可<sub>レ</sub>罷成<sub>一</sub>哉。其上同類召捕候節、紛敷者見分候ためにも可<sub>レ</sub>成哉と奉<sub>レ</sub>存候。

こういう伺書を大坂町奉行が差出したのに対して、老中からはこの通りにせよと書いて来ている。趣旨は『月堂見聞集』の記事と同様だが、一つだけ、同類を召捕った時にまぎらわしい者の「見分（検分）」をさせるのに役立つという一条があるのが面白い。目明しに使おうというのである。

それとはかく、この三人は室鳩巢書簡にある「張本人三人」に外ならず、間もなく彼等が金右衛門を捕らえることになる。こうなると、毛刺一件の大量逮捕と先生金右衛門の逮捕とがつながって来るのである。鳩巢書簡の後段を見よう。

然る処、右三人して金右衛門を捕へ、当地へ罷越申候。此金右衛門と申者、第一の首魁にて、唐人の服着用いたし、唐人と合体いたし、唐人の船中にて唐人に罷成、日本の案内いたし、日

「三千世界商往來」と先生金右衛門

本人を招集め、此者被<sub>レ</sub>捕不<sub>レ</sub>申内は、ぬけ買やみ申敷と申候へば、此金右衛門と申者は、唐へも渡り、唐人と申合候て、海上を自由に廻り候故、中々難<sub>レ</sub>捕候。唐人の海賊ども首魁をば先生と号申候。福州音にてシヤンスイと唱申候。然処に此金右衛門を此度三人捕へ出し候事、諸人驚申候。此三人金右衛門と一体の者にて、此三人より外には金右衛門を捕へ申事成間敷と申儀、上（將軍）によく御合点被<sub>レ</sub>遊候故、右三人死罪に御老中先として決断有<sub>レ</sub>之候上を、特命にて御免し、さて右の通被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候へば、果して御手に入申事、（將軍）御智慧の程、御老中初諸役人も奉<sub>レ</sub>感由申候。（下略）（傍線引用者）

まず目を引くのは——線部の記事である。海上を自由に廻り、唐人社会とも同化しているという、鎖国体制から完全にはみ出して自由な、それこそ「国際化」した行動様式の特主だったことである。その八幡 (Hattori) としての實力に対して、「唐人の海賊」が「先生」の尊称を与えたという。だから彼を捕えぬうちは抜荷はなくならな  
いと思われていたほどであった。しかしその金右衛門を「此三人」が、どういう策略を用いたのかわからないが、まんまと「捕へ出し」たのだから、誠に蛇の道はへびである。しかも三人を放免したのである。その間僅三ヶ月余り。金右衛門は余りにもあつけない捕えられたことになる。取締当局の狡智は金右衛門の上を行くものだったであろう。

## 五

ところが、この金右衛門をも当局は赦免して、その上に十人扶持を与える。

先生金右衛門 播磨屋又兵衛 久保甚左衛門 右三人のもの  
大坂之牢に久々罷在候処 此度御免にて 十人扶持づ、被レ下  
家財も下され候 (『通航一覽』巻二百二、享保五年)

これまた、それだけの利用価値が認められ、期待されたのである。そして三人の者は確かにその期待に答えた。享保五年六月の漂流唐船襲撃の一件である。これについては『通航一覽』にも記事があるが、それより小笠原文庫蔵『唐船漂流記』三冊(注9)が詳細であり、かつ、当事者小倉藩に伝わる記録として信頼しうるので、これによって略述する。

この頃幕閣は、小倉沖藍島付近に「漂流」して日本の抜荷船が漕ぎ寄せるのを待っている唐船の絶えないのに、業を煮やしていたらしく、金右衛門等三人に「調略を以」て唐船を本土の近くにおびき寄せさせた上で、これを打払うことを藩に命じた(鉄砲・大筒等による打払いである)。唐船(唐人)に顔のきく金右衛門等の「調略」が期待されるわけである。大坂町奉行を通して命を受けた小倉藩役人は、五月八日ひそかに三人を伴って小倉に帰るが、唐船おびき寄せの調略の実際は「三人之者へ御任(おまかせ)の事」となっていた。準備は隠密裏に、入念に行なわれている。

六月十一日、三人は抜荷商人をよそおって小倉沖に漂流する一艘の唐船に乗り込み、商いの交渉をしつつおびき寄せの調略につとめ

たが、唐船側は「功(巧)者成者」でその手に乗らず、三人のうち二人は「唐船に残り」、一人は買った抜荷を運んで陸上と連絡を取るといふようにして数日を経たが、終に成功せず、十六日には断念して引き上げた。

しかし、この日「新来之唐船一艘」の漂流を発見し、これの打払いにとりかかる。三人の者はこの船の唐人も「兼而入魂之儀」であったから、十六日夜からこの船への調略を開始する。しかし、この唐船もやはり警戒していておびき寄せることができない。その夜は金右衛門一人唐船に残り、二人は帰ったが、ここで方針を変更し、翌十七日夜、捕手を乗せて咎で隠した荷物船を漕ぎ寄せ、いっせいに唐船に乗り移らせた。捕手は抵抗を排除して唐人をことごとく「搦(からめ)置」き、その中から金右衛門の「目明し」で船頭外二名の頭だつ者を「無異議」召捕り、長崎送りとした。

この仕事に対する褒美として三人の者は各々銀十五枚を与えられ、七月二十六日大坂に帰着、町奉行に復命した。当局としてはこれで、抜荷目的で漂流する唐船に対する強い警告をすることができたわけである。吉積久年氏の研究(注9参照)によると、享保五年十月以降享保八年四月まで、このあたりの海域に「唐船漂着あるいは漂泊の記録は見出せない」とのことである。享保五年には筑前藩による唐船打払い(焼沈)があったから、それと相俟って、効果は上ったものと見られる。

この金右衛門については、やはり『通航一覽』(巻二百二)の次の記事が注意を引く(前引の金右衛門ら三人赦免の条に続く)。

三人之内 金右衛門大分限者 殊に博学多才 能書のよし 此



度御免を有がたく存じ 帰席之詩を差上候

釣命岳就茅時 慈恩相似□□児 馬牛争酬生前事

不覚襟裾感汗垂

場合が場合だけに甚だ神妙な詩である。この記事は更に続く。

右金衛門 初生長門のものにて 抜荷買頭取仕 元良島に住

居仕居候 其節故郷に送り候詩

抱懷誰与語 脉々水天長

費杖無由索 伯琴徒愧粧

雁伝南国信 榮発日本芳

屢在趣陪夢 覚来月在梁

この詩がどれほどのものか、私には十分判じ得ない。しかし抜荷の頭目としてはやはり「博学多才」と認めてよいようである。「唐船漂流記」にも「別而金右衛門儀は文才も有之」と記されている(注10)。

さて、金右衛門のその後の消息はまだ私にはわからない。しかしここまで辿ってみると、並木正三が狂言の三幕目で舞台を福建の漳州とし、そこで悠々と茶の湯者ぶりを見せる趣向を立てた理由がわかって来る。金右衛門の博学多才能書という噂——教養人のイメージ——をここで生かしたのである。これは金右衛門という人物の大きな特色と言っている。

宗政五十緒氏は「毛剃は逮捕されたか——『博多小女郎波枕』の実説とその背景——」という論文(注11)で、近松の毛剃には抜荷の首魁として先生金右衛門を重ね合わせてみる必要があるとの見解を発表しておられる。私は宗政氏が昭和三十年代において早くも室

鳩巢書簡から先生金右衛門に注目された烟眼に敬服する。しかし、重要なことは、近松の毛剃には金右衛門の特色たる「国際的」な活躍や「博学多才能書」というような教養人の面影が全く感じられないことである。この点では私は宗政氏の御説に同じ得ない。

## 六

以上のごとく第三幕は先生金右衛門という日本人として型破りな人物の特色を写し取って、悠々たる大型の騙りを、しかも外国で展開している。「三千世界商往来」の外題が最も生きている一幕といつてよい。ところが初演時の絵戻しにはこの幕が全く描かれていない。役割番付はというと、これにもこの幕だけに登場する人物の役名は一人として記載されていない。さらに評判記を見ても、この幕についての評判は全然ないのである。この幕は実際には舞台にのぼされなかつた幻の一幕だったのであるまいか。評判記『役者物見車』は明和九年三月の刊記を持つ。通常のケースで考えれば、評判記筆者はぎりぎり二月初めまでの舞台の情報を得て評判を書くだろう。とすれば、少なくとも一月十日の初日以来、二月始めまでは第三幕を演じていなかったことになる。絵戻し・役割番付の状況と考え合わせて、これはやはり上演されなかつたと考えざるを得ない。もし後から追加上演したとしても、この座の興行責任者乃至幹部俳優たちが、第三幕をネグレクトしてもよい幕と考えていたことだけは確実である(注12)。

そうだとすると、正三のせっかくの新しいアイディアは正当に評価されなかつた。上演されなかつたとすれば、全く生かされなかつ

たのである。巷間伝えられたであろう先生金右衛門の、「三千世界」を股にかけた並外れた悪党の魅力は、第二幕朝鮮国でのかたり——かたりの面白さでは第三幕に遙かに及ばない（注13）——で終わってしまう。なぜ「終る」のか。それは、第四幕以後が日本国内に限定されていて、歌右衛門としては手馴れた、型の如き謀叛人劇へと移って行ってしまうからである。以下、簡単にその状況を見ておく。第四幕。小豆島の浜辺。若殿采女之助と傾城長門はここまで逃れて来るが、「黒ん坊」はここにも現れて長門を奪おうとする。小豆島の九郎作が旧主筋の采女之助を救う。ここは次の幕の導入部に当る短い一幕。台帳で僅か十三丁である。

第五幕。小豆島。今は門兵衛と名のついている金右衛門の隠れ家。女房小女郎は諸商人の掛け取りに責められて、日用品の代金の代りに虎の皮や錦や伽羅などを惜しげもなく与えるので疑われる。

今度金右衛門といふ者が唐へ渡つて 方々の島々を山に掛けて（かたりに掛けて） 根ざり引さらへて廻るげな 凡（およそ）山の司（かたりの頭目） じゃといふて 山シ司の金右衛門といふ關所破り也 三千世界を術（かたつ）て廻る大衛じゃといふて 久吉様からお尋者の配符が廻つた。

だからこんな気味の悪い物は受け取れぬと掛け取りたちは言う。そこへ門兵衛（金右衛門）が帰って来て人々を追い払う。彼は相変わらず島々国々をかたり歩いていられるらしく、

是からが金儲けじゃ したが 是迄儲けた金が 何が五万両や 七万両といふ事が有ふか 爰へ宿替へてからも 千両や式千両の金は入れたが とんと淵へ塩入る様な身代じや

などとうそぶいている。

そこへ久五郎が六十六部の姿でやって来て一夜の宿を乞う。門兵衛と久五郎のさぐり合い。九郎作が長門を連れて来るが、「黒ん坊」がまた跡をつけて来てこの家に入りこみ、さまざまに九郎作らの邪魔をすることあり、評判記ではここが好評であった。「黒ん坊」は金右衛門を捕えるための「目明し」として、日本国内の通行往來を許されているのである。そこへ代官が武智（本文「武智」と「明智」を混用）の残党や采女之助の探索に来る。ここで始めて「武智の残党」という新しい劇的要因が登場する。「黒ん坊」が門兵衛を金右衛門と見破るなどいろいろあつて、六十六部の久五郎は武智光秀の一子左馬五郎光秋と名のるので、小女郎は「私は光秀様の御譜代大矢作左衛門が娘」で、武智の再興、久吉への復讐のための軍用金を作ろうとして、「三千世界を駆け廻る八幡（ははん）の棟梁」と夫婦になつたと語り、久五郎の左馬五郎に軍勢催促の勘合の印を渡しておいて、光秀を刺した小栗栖の竹槍の穂先で自害し、光秀のこの恨みを晴らすことを託する。

こうして狂言は足早に武智光秀の遺児による真柴久吉への復讐謀叛劇へと展開して行く。

しかるに久五郎はまことは左馬五郎ではなく、門兵衛の金右衛門こそ左馬五郎であつた。そうと知つた彼は、今までは町人として金銀を集め、榮耀榮華をすることだけを考えていたが、「今よりは武智左馬五郎」として「謀叛の棟梁」とならんと言ひ、

日本が（我三）味方せずは 三千世界の島々国々 片つ端から 味方に付け

久吉が首を取るのだと宣言する。八幡の棟梁山司金右衛門はこうして謀叛人劇の主人公となる。歌右衛門の最も得意とする、評判記が「御商売筋の」という狂言である。現にこのあたりからさき、次の第六幕にかけての歌右衛門の芸に対しては、評判記も「彼（かの）御商売筋にてずんど手づよく、よう見へますれ共云々」といった評をしている。

第六幕。撰州舞子の浜。左馬五郎は朝鮮国王乾隆皇帝の亡霊から、久吉への復讐のため、三年間を限って有効な「通刀自在」の秘法を伝授される。

第七幕。左馬五郎は島田勝家を味方として叛逆をはかるが、これは勝家の罠であった。このあたり目まぐるしいどんでん返しの連続である。しかも外国を味方に付ける計画も成功せず、一方、勝家は三年の歳月を短時日に経過させてしまう方略に成功するので、亡霊伝授の秘法も無効になってしまう。大話には三段返しを使った大仕掛な舞台転換が目を驚かしたと思われる。並木正三の作らしい大話であった。

## 七

全編の構成を簡単に整理しておこう。

第一幕 長崎。抜荷と阿蘭陀人殺し。

第二幕 朝鮮。国の財貨を奪い去る。

第三幕 福建。漳州の財貨をかたり取る。

第四幕 小豆島。第五幕への導入部。

第五幕 小豆島。金右衛門は武智の遺児とわかり、復讐に立上

「三千世界商往来」と先生金右衛門

る。

第六幕 舞子の浜。朝鮮国王の亡霊出現。

第七幕 京都。勝家らに裏をかかれ、謀叛は失敗。終結。

このように、第三幕までが、「先生金右衛門」をモデルとした狂言にふさわしい内容であるが、第四幕以後は武智の遺児による型の如き謀叛人劇のレールの上を進むことになる。「先生金右衛門」の影が薄くなって、武智左馬五郎の狂言になって行くのである。

さらに仔細に見ると、第一幕には山司金右衛門は登場せず、その女房お千代（のちの小女郎）の口を通して、「こちの金右衛門様は運を商売にさんす故 今日長崎にかと思や 明日は大坂に成」などと噂に上り、甲比丹でいかうが、金右衛門がいてくれたら貿易品は大部分「抜てしまふ」のだが、などと抜荷を手伝ってもらいたいような口吻をもらすという程度で、主役は甲比丹でいかう（歌右衛門）と通詞の久五郎（八蔵）である。そうすると、第三幕が上演されなかつたとしたら、金右衛門の「八幡の頭目先生金右衛門」らしい活躍の場は、僅かに第二幕しかない。ところがこの幕は台帳表紙に「小幕」とあるように、二十四丁の短い幕で、第五幕の五十一丁、第七幕の四十八丁に比べると、その半分の量しかない。活字翻刻の頁数に直すと、第五・第七の各幕の三分の一にすぎない。それに反して第三幕は六十七丁、翻刻頁数に直すと第五・第七各幕にはほぼ等しい。それだけの量を占める第三幕が、「先生金右衛門」の面白さを最もよく生かした一幕であるが、そこがネグレクトされているのである。恐らく遂に上演されなかつたのであろう。

もつとも第五幕以後にも「先生金右衛門」らしい所が全く描かれ

ないわけではない。たとえば第五幕では例の「黒ん坊」が小豆島の門兵衛を疑って、「奥には天竺の産物 鳥々の道具織物 疑ひもない 我や山司の金右衛門」と言ったりする。事実、それらしい財宝が貧家の中に積み上げられている、いかにも山司金右衛門の隠れ家らしい場面と言える。また、第七幕で武智左馬五郎となった主人公は、「我（われ）山司の金右衛門といひし時 国々鳥々を巡つて数の宝を奪ひ取 栄耀を極れ共」と言ったりもする。しかるに彼は肝心の謀叛復讐のために、集めた財宝を使った形跡もない。僅に一ヶ所、次のような会話が交わされるだけである。

左馬五郎 蛮国を往来したる通路を以て 異国の鳥々国々を  
味方に付る我計略 連判取は黒主（くろす）。「黒ん坊」のこと  
が役 仕果（しおお）せしか 何と

黒ん坊 仰を請て蛮国へことごとく通路し 異国の一味連判  
は取置升た 堺の沖へ追々兵船相見へ升

左馬五郎 其方は是よりすぐに堺の浦へ立越 異国の兵船一  
時に駆け上げがらせ 有無を言わず都へ押しかけ 攻登れ  
黒ん坊 畏つてムリ升

しかし、この時すでに「黒ん坊」は勝家側によつて「昨日討て捨」てられていて、この場の「黒ん坊」は体に漆を塗つて変装した小西弥十郎であるから、一味連判の異国の兵船が堺に来るといふのも、左馬五郎をあざむくセリフである。ここは左馬五郎が完全に裏をかかれた大詰の場面である。なるほど左馬五郎は「黒ん坊」という「国際人」に命じて「異国の鳥々国々」を味方につけようとしたと言ふ。しかし、このセリフ以外に左馬五郎の金右衛門は、彼にしか出来な

いような作戦を実行した形跡がない。第一、「黒ん坊」は山司金右衛門を探し出す「目明し」の役で、金右衛門の命令で動く人物ではないはずである。こう見てくると、作者自身が左馬五郎に金右衛門らしい叛逆をさせるプランを持つてはいなかったと言わざるを得ない。左馬五郎の頼るところは朝鮮国王から授かった術だけである。私が「型の如き謀叛人劇のレールの上を進む」と言うのは、このゆえである。「三千世界」を駆け巡る山司金右衛門にしては、あつけない敗北ぶりであつた。

大詰めの歌右衛門に対する芸評として六で次の部分を引いておいた。「彼御商売筋にてずんど手つよく見へますれ共」。が、実はこれに続く評文は次の通りであつた。

今少し物のたらぬやうにて 此位の事は有うちと存る体 近比  
残念 しつかりとした狂言を待ます

これは作者に対するなかなかきつい評判である。「歌右衛門に対して平凡な役しか与えていない。もつとしっかりした狂言を望む」というのである。もし第三幕が演じられていたら、この評はもう少し違つたかと思う。もつともこの評者の視点と私とは一致するわけではないけれども。

私としては、鬼才並木正三を以てしても、「先生金右衛門」という当時の日本人の枠を飛び出した「八幡の棟梁」は、料理しきれなかつたのかと思う。そういう主人公の狂言としては挫折したと考えざるを得ない。もつとも「先生金右衛門」自身が公儀の「目明し」になつて、抜荷仲間の逮捕に一役買うようになった事は、日本人の行動の美学に照らして大きな挫折であり、彼の魅力の大半を失わし

めていたのかも知れない。いや、それよりむしろ、鎖国の国禁を犯す大盗の魅力を認めるような精神的風土がなかったことこそ、この狂言の挫折の真因と見るべきであろう。

#### 注

- (1) 『歌舞伎台帳集成26』に翻刻。
  - (2) 荒野泰典氏「近世中期の長崎貿易体制と抜荷」(『近世日本と東アジア』一九八八年、東大出版会)
  - (3) 山脇悌二郎氏「抜け荷」(一九六五年、日経新書)
  - (4) 板沢武雄氏「鎖国時代における密貿易の実態」(法政大学文学部紀要7号、昭和36年)
  - (5) 正確にはこの書の末尾に追加されている「崎港商説」の中の記事。
  - (6) 注2に同じ。
  - (7) 『通航一覽』巻二百一は「月堂見聞集」の写しを収めるが、それには「四分一」とある。
  - (8) 注4の板沢氏論文の外に、諏訪春雄氏「博多小女郎波枕」(『近松世話浄瑠璃の研究』笠間書院、昭和49年)に引かれている。以下、諏訪氏の論文によって記す。
  - (9) 小笠原文庫は旧小倉藩主小笠原家から福岡県立豊津高等学校 錦陵同窓会に寄贈された蔵書で、現在豊津高等学校に保管されている。
- 吉積久年氏は本書を調査されて、「近世、長州唐船の記録」(九州大学国史学研究室編『近世近代史論集』、吉川弘文館、平成2年)の中で、享保五年六月に現れた唐船に対して「元

抜荷の巨魁先生金右衛門ら三人が計略を巡らして、うち一艘(船主谷子玉)が六月十七日の夜、巽にかゝり一網打尽」になつたと書いておられる。

- (10) 『西沢文庫脚色余録』三編下「歌舞妓謀叛人名の考」に、「三千世界商往来といふ古狂言に山西(マドリード)の金左衛門と云実悪の役名有 是は海外を歴遊して書を能し 後大坂に住すと 書画一覽雜の部に出たる也」とあるのも参考になる。

- (11) 宗政五十緒氏「毛刺は逮捕されたか——『博多小女郎波枕』の実説とその背景——」(『東山高校研究紀要第九集、昭和38年』)
- (12) ちなみにこの座の次の替りの興行は三月二十五日からである。「三千世界商往来」は三月上旬まで続演された可能性はある。
- (13) 朝鮮国民を「かたり」にかけるといふより、むしろ久吉の城受取りの計画をだしぬいたという意味で、久吉の部下たちに、一杯くわせる一幕という方が正確であろう。

#### 追記

御教示を賜わった吉積久年・荒野泰典の両氏、また資料の閲覧に際して便宜をおはかりいただいた豊津高等学校 に対して、厚く御礼申し上げます。